

重度・重複障害児を対象としたダンス活動

筑波大学付属桐ヶ丘養護学校 松原 豊

1. はじめに

ダンス活動はスポーツと異なった、様々な有用性を子どもたちに提供することができる。重度・重複障害があり発達段階の低い子どもたちに対するダンスの指導において、彼らの障害が重く、経験することに限界があり、考えたり感じたりできないのではないかという理由で、ダンス活動に参加できないということはない。よく検討された理念と技術があり、適切な題材が用意されれば、基本的に障害のない子どもたちへの指導と大きな違いはない。

ただし、ダンスには非常に多くの種類があり、重い障害のある子ども達にとって、全てのダンスが適しているわけではない。例えば、バレエや日本舞踊のように独特なスタイルのダンスはアレンジする必要があるし、自然な動きを基本とした創造的なダンスはモチーフを工夫する必要があるだろう。従って、障害の重い子どもたちの特別なニーズに合う、適切なダンス活動の内容、指導法、評価等の検討は必要かつ重要である。

2. 研究方法

ダンスには表1に示したように2つのタイプがあり、それぞれ障害のある人に適応するために、修正や工夫が必要となる。

表1. ダンスのタイプと障害児・者への適応

	型のあるダンス	型のないダンス
定義	構造化されたダンス。振り付けや構成があらかじめ決められている。	探求と創造のダンス。振り付けは決まっておらず、即興的に動いたり、創造したりする。
ダンスの種類	フォークダンス、社交ダンス、バレエ、ジャズダンス等	即興的ダンス、クリエイティブダンス、ダンスゲーム等
ねらい	振りやステップの習得、音楽と動きの調和、動きの育成、発達、社交、交友、パフォーマンス	気づきや動きの探求と創造、自由で自然な動きの経験、コミュニケーション、リラクゼーション
障害のある人への適応	ダンステクニックの変更、修正、振り付けの工夫、適切な援助	動きやすい環境づくり、動きに気づき、動きを引き出すための創意、工夫（音楽、小道具）

どちらのダンスを選択するかは、参加者の身体

的、認知的能力、指導者と参加者が満足できる指導スタイル、指導者が到達して欲しいと望むゴールなど様々な要素によって判断すべきである。

そこで今回の研究においては、(1)型のあるダンスとして、補助者とペアになって行うフォークダンス活動、(2)型のないダンスとして、動きを引き出すために音楽を用いた即興的な身体表現(ダンス)を活動内容として選択した。それぞれの実践について修正、工夫した点をまとめた。また評価の方法として、フォークダンス活動では簡単な評価票を作成した。即興ダンスではSD法を用いた評価を行った。

3. 研究結果

(1) 型のあるダンスについて

フォークダンス活動は、あらかじめ決められた振りを音楽に合わせて行うため安心感があり、一般的にもなじみがあり、取り組みやすい活動である。障害の重い子ども達が行う場合は、自力で動くことが困難でも、パートナーの適切なリードと補助によって楽しむことができる。適応の工夫として、①シンプルな振り付け、②柔軟な指導、③多面的なアプローチ等を試みた。

評価として補助者が簡単に記録できる評価票を作成した。その結果、参加者はダンス活動を楽しみ、コミュニケーション面、運動面に有効な刺激を得ることができたことが示唆された。

(2) 型のないダンスについて

2名の重度・重複障害児を対象として、音楽を手がかりとした即興的ダンスを実践し、①対象者がどのような表現を行ったか、②表現に対する客観的な評価についての知見を得ることを目的として検討を行った。その結果、対象者は2名とも音楽を感じて即興的に表現する様子が見られた。またそれに伴い、感覚(聴覚)運動水準が向上した。

SD法を用いた評価は、指導者の観察による主観的な評価を裏付けてくれる結果となり、複数の目から見た客観的な妥当性を与えてくれたことが示唆された。(図1)

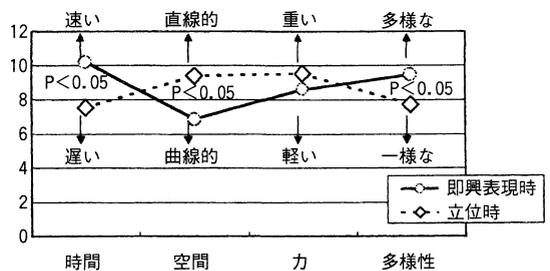


図1. SD法を用いた即興的ダンス評価の例